

# ポルトガル語の数の記述における諸問題

## Algumas considerações do número em português

坂東 照啓

Teruhiro BANDO

### 0. はじめに

数(すう)は「かず」の概念と結びついている文法範疇であり、ポルトガル語の名詞の数は、およそ1対2以上という概念に対応して単数と複数に分かれる。数が基本的に「かず」という概念に基盤を置いているという点において、前年度の本学会の統一テーマでもあった性と比べると、明らかに意味範疇との関連が深いと言える。しかし、数も文法範疇である以上、文法性が社会的な慣習によって決定されており、自然性と区別されることと同様に、概念上のかず(意味上の数)とはやはり本質的に区別される。数は、性、あるいは格、人称などと比べ、意味との関連が深いため理解しやすい面もあるが、その反面、意味上の数と混同しやすいので注意を要するのである。本稿では、このポルトガル語の数について基本的な文法上の特徴をあらためて観察、確認することを通して、従来なされている数の記述に対する検討を行い、その記述の補完を目標とする考察も加えていく。

### 1. 文法上の数の基本概念

数について、Camara Jr. (1978:179)では次のように述べられている。

- (1) categoria gramatical que leva em consideração o número dos indivíduos designados nos nomes, essencialmente os substantivos. Em português pela concordância se estende aos adjetivos e aos verbos, que entram em concordância de número com a pessoa do sujeito.

数は基本的にかずの概念に対応する文法範疇であるという見解が文法家の間ではほぼ一致してみられる。従って、(1)における記述も一般的と言えるが、この(1)ではさらに、形容詞、動詞にも呼応による数の変化があるという記述も加えられている。つまり、数は名詞だけではなく、形容詞(及び、冠詞)、動詞にも認められる範疇ということである。

しかしながら、数は形容詞、動詞にも認められるとしても、やはり(1)でも述べられているように、基本的には名詞に関わる範疇と考えられる。

- (2) o rapaz feliz — os rapazes felizes

- (3) a. Maria foi ao cinema.

- b. Maria e Paula foram ao cinema.

(2)において名詞であるrapaz, rapazesの数はその対象物のかずに対応するが、feliz, felizesの数はこの形容詞が表わす性質とは無関係である。つまり、形容

詞の数は修飾する名詞の数に一致したものであり、意味に対応しているわけではないのである。冠詞 *o*, *os* の数も形容詞の数と同様で、修飾する名詞の数に一致したものである。さらに、(3)における *foi*, *foram* の数も、この動詞が表わす行為とは無関係である。つまり、動詞の表わす行為が、1回か2回以上かといったような概念を示すわけではなく、主語の名詞の数に一致したものである。

すなわち、名詞の場合、数は意味との対応が認められるが、それ以外の品詞の数は関係する名詞の数によって決定される。言い換えると、名詞以外の品詞の数は意味とは関係なく文法に基づいているということである。従って、名詞の数がかずという概念に対応するという点において本質的であり、数は本来的に名詞の範疇であるとみなされる。

名詞の単数と複数との区別は、基本的には上でも述べたように、示される事物の数が1か2以上かによってなされる。しかしながら名詞で示される対象には、1か2以上かといった認識ができないものもある。物質名詞、抽象名詞で表わされる対象には、かずの概念が適用できないのである。それにもかかわらず、文法上は単複の区別が義務的になされる。これは、ポルトガル語における数は義務範疇なので、すべての名詞について、概念上のかずとは無関係に数の区別が必要とされているからである。そのため、かずによる区別ができない対象を示す質量名詞であっても、文法上数の区別はなされることになる。さらに、集合名詞の場合には、示される対象のかずは2以上であっても、それを1つの単位とみなすので、意味上のかずと文法上の数にずれが生じるという問題もある。

小泉(1990:59-60)では、こうした名詞の数について次のように述べられている。

- (4) 文法的数は、物象を単一体として扱う「単数」と、集合体として扱う未分の「複数」に分けることができると思う。この未分の複数が、不特定の集合群と特定の集合群に分化する。前者は英語で集合名詞とよばれるもので、分解不可能な集合体であり、後者が普通一般に受けとめられている個体集合の複数で、分離可能な単位の集まりである。集合体は見方により、個体集合とも単一の集合体とも受けとられる。

さらに、小泉(1990:60)では、(英語の)単複の区別は名詞の複数語尾 *-s* の有無ではできず、数の一致や人称直示詞(代名詞)の代用の仕方で見分けるしかない、という見解が述べられている。これは、数の単複が名詞の語形という形態論ではなく、統語論、語用論で扱われるという説であり、従来とは異なる視点で数が捉えられていると言える。

小泉(1990:59-60)における数に関する説は、英語が例にとられているものの、同じく数が義務範疇であるポルトガル語にもあてはまるものである。従来、数は主に形態論で扱われてきたが、この説は新しい観点からの数の記述の可能性を示している。

## 2. 複数形の形成の特徴

複数形は一般には単数形に *s* (歯茎摩擦音) を付加することによって形成されるが、これはラテン語の対格複数 *s* に由来する。

## 2. 1. 単数語尾 *-ão* に対する複数形

単数形の語尾が *-ão* の場合、複数形の語尾に3つの異なる形式があるが、この複数形はそれぞれが由来するラテン語における形式(対格複数形)に対応している。(なお、本稿で用いる略記号は後に一括して掲げる)

- (5) *-ões*: i) *-ones*, *leões* < *leones* (sg. *leão* < *leom* < *leone*, *leo*, III dec.); ii) *-udines*, *multidões* < *multitudines* (sg. *multidão* < *multidom* < *multitudine*, *multitudo*, III dec.)
- (6) *-ãos*: *-anos*, *irmãos* < *germanos* (sg. *irmão* < *germanu*, *germanum*, II dec), *mãos* < *manos* (sg. *mão* < *manu*, *manus*, IV dec.)
- (7) *-ães*: *-anes*, *cães* < *canes* (sg. *cão* < *cā* < *cane*, *canis*, III dec.)

単数形において *-ones*, *-udines*, *-anos*, *-anes* というラテン語の4つの語尾が *-ão* に統一され、複数形において古い形を残している。ただし、すべての *-ão* に対する複数形がラテン語の対格複数形に従っているわけではない。

- (8) *escrivão* — *escrivães* (lat. *escribanos*), *capitão* — *capitães* (lat. *capitanos*), *tabelião* — *tabeliães* (lat. *tabelliones*)

これは、4つの異なる単数形語尾が *-ão* に統一されたことによって語源に従う複数形語尾が混乱し、歴史的な複数形が意識されずに、語源とは異なる複数形語尾が選択されてしまったためではないかと考えられる。

単数形の語尾が *-ão* でラテン語に対応する語形がない場合は、*-ões* が複数形として一般的である。

- (9) *botão* — *botões*, *vagão* — *vagões*

これは、単数形 *-ão* に対する3種の複数形のうち、*-ões* がラテン語に由来する語でもっとも多い形式であることから類推されたものと考えられる。

単数形の語尾が *-ão* の名詞には複数形が1つに限定されていないものも存在する。

- (10) a. *vilão* — *vilãos/vilões* (< *villanos*)  
b. *ancião* — *anciãos/anciães/anciões* (< *antianos*)
- (11) *artesão* — *artesãos* (*artífice* 美術家), *artesões/artesãos* (*adorno arquitetônico* 装飾品)

(10a, b) のように、語源に従う複数形とともに、語源と異なる複数形も現れたのは、単数形が *-ão* に統一されたことによって複数形語尾に混乱が生じたためと考えられる<sup>1)</sup>。(11) の場合は、複数形が2種類あるが、それぞれで意味が異なる。従って、それぞれの意味について単数形が同形で存在しており、それぞれに対する複数形が別の形で存在しているという考え方もできる。

## 2. 2. 母音変異

ポルトガル語の複数を示す形式は一般には語尾の *s* (歯茎摩擦音) であり、単数を示す形式は音形のないゼロ形式である。Camara Jr. (1978:179) においても複数形について次のように述べられている。

- (12) *em português se indica o plural pela desinência constituída da consoante sibilante pós vocálica, representada na escrita*

por -s. O singular se indica pela ausência dessa desinência, ou morfema zero.

しかし、数変化に s だけでなく、母音変異(metafonia)を伴う(13)のような名詞も存在する<sup>(2)</sup>。

(13) olho [o] — olhos [ɔ], ovo [o] — ovos [ɔ]  
単数・複数で語尾の変化とともに、強勢母音にも変化が生じている。つまり、単数で [o] である強勢母音が、複数では [ɔ] になるのである。

この母音変異は、語幹の強勢母音が屈折語尾の弱勢母音に同化するという現象で、歴史的に13世紀には生じていたと考えられている。

(14) cōrpū- [ɔ] > corpo [o] — cōrpōs > corpos [ɔ]  
ラテン語の ō はポルトガル語では、普通、[ɔ] に変化したが、(14)のように単数において語尾に ū がある場合、その影響で [o] に変化したのである。

もっとも、すべての名詞が母音変異を起こすというわけではない。

(15) lobo [o] — lobos [o], estojo [o] — estojos [o]  
実際、母音変異を起こさない名詞の方が多数であり、母音変異が生じる名詞は少数である。

形容詞においても母音変異は観察される。

(16) a. novo [o] — novos [ɔ] (nova [ɔ], novas [ɔ])

b. formoso [o] — formosos [ɔ] (formosa [ɔ], formasas [ɔ])  
名詞と同様に強勢母音が男性単数では [o]、男性複数では [ɔ] であり、女性形も単複いづれも強勢母音が [ɔ] である。この強勢母音の変化も、語尾 ū の影響によって [o] に変化したものである。

(17) nōvū- > novo [o] — nōvōs > novos [ɔ] (nōvā- > nova [ɔ], nōvās > novas [ɔ])

(16b) に示した語末が -oso の形容詞は、(16a) と異なり、formoso の場合、由来する形式が男性単数 fōrmōsū-、男性複数 fōrmōsōs である。この男性単数で語尾 ū が強勢母音に対して影響すると -uso [u] に変化すると考えられるが、実際には -oso [o] となっている。これは、(16a) の型との類推によって変化が起こらなかったためと考えられる。男性複数でも、ラテン語の ō はポルトガル語では、普通、[ɔ] に変化したので、-osos [o] のはずであるが、実際には -osos [ɔ] となっている。歴史的には formosos [o] も存在したが、この男性複数も (16a) の型との類推によって [ɔ] へ変化し、これで、強勢母音について (16b) の型が (16a) の型に完全に一致することとなったのである。

もっとも、すべての形容詞において母音変異が生じるわけではない。

(18) gordo [o] — gordos [o] (gorda [o], gordas [o])  
実際、(18) のような母音変異を起こさない形容詞の方が多い。(16b) に示した -oso が語尾の形容詞では強勢母音の交替が起こるものの、母音変異が生じる形容詞は少数である。

なお、こうした母音変異は固有名詞には起こらないという特徴がある。

(19) a. porto [o] — portos [ɔ] (lugar de costa que permite ancorar um navio 港)

### b. Os Portos não vieram hoje. [o]

(19a, b) のように、普通名詞としては母音変異が生じても、固有名詞である場合には母音変異が起こらない。この場合、母音変異は普通名詞と固有名詞を区別する働きを持っていると言える。

母音変異を起こす名詞については、ポルトガルとブラジルでの差異もみられる。

(20) の名詞の複数形は、ポルトガルでは [o]、ブラジルでは [o] である。

(20) Pt[o] / B[o]: almoço — almoços, pescoço — pescoços, esposo — esposos

上で述べたように、母音変異を起こす名詞（及び、形容詞）は少数である。

Ribeiro (1955:299) において母音変異を起こす名詞が列挙されているが、その内のいくつかは、今日では母音変異を起こさない名詞とされている。(21) の名詞は、Ribeiro (1955:299) においては母音変異を起こす名詞とされているものの、すでに Jota (1960:536-539) において母音変異を起こさない名詞とされている。

(21) barroco, canhoto, corvo, horto, sogro, toco, toldo, tordo, torno<sup>(3)(4)</sup>

この逆に、母音変異を起こさなかった名詞で母音変異を起こすようになった例は見られない。このことから母音変異を起こす名詞は減少していることがわかる。これには、語尾変化も母音変異も、ともに単数と複数とを区別する働きを有するものの、そもそも語尾の変化がほとんどの名詞で起こるのに対し、母音変異は少数の名詞にしか起こらず、綴り字にも反映されないということが関係していると考えられる。数の区別にとっては、語尾の変化に対し母音変異が余剰的な現象でしかなく、母音変異を起こさない多数の名詞への類推が働いているものとみなしうる。

## 2. 3. 強勢の移動

数変化に語尾の変化だけでなく、強勢の移動を伴う名詞も存在する。

(22) a. caráter — caracteres, sênior — seniores, júnior — juniores, sóror (soror) — sorores

b. Lúçifer — lucíferes

(22a) は、由来するラテン語での強勢位置に対応するもので、語源の強勢位置が保たれているためである。(22b) は、語源的に最後から2番目の音節が短音節であったこととポルトガル語の強勢位置の制約が関係していると考えられる。つまり、複数の強勢の位置が単数と同じ位置では後から4番目の音節になるが、ポルトガル語では後から3番目までの音節にしか強勢は置かれぬのである。さらに、後から2番目の音節は短音節であったため、強勢は後から3番目の音節までしか移動しなかったと考えられる。

## 2. 4. 指小語

指小接尾辞が付加された語の複数形は、語尾にのみ s が現れるのではなく、指小接尾辞を除いたもとの語の部分も変化する。

(23) a. balãozinho — balõeszinhos (balões+zinhos); pãozinho — pãezinhos (pães+zinhos); papelzinho — papezinhos (papéis+zinhos); anzolzinho — anzoizinhos (anzóis+zinhos);

cãozito — cãeszitos (cães+zitos)

b. colarzinho — colarezinhos/colarzinhos (colares+zinhos);  
florzinha — florezinhas/florzinhas (flores+zinhas)

(23a) のように、指小語の複数形は、指小接辞を除いたもとの語も s を除く複数形になる。ただし、(23b) のように、もとの語の語尾が r で、これに指小辞が付く場合には、派生語の語尾のみが変化する複数形が存在する。ここで (23a) と同じ規則で複数形を形成されるならば、もとの語に e が必要である。しかし、実際には、派生語尾のみを変化させた形式が複数形に用いられる傾向にあることが一般にも指摘されている<sup>(5)</sup>。これには、e が後の第 1 強勢音節と前の第 2 強勢音節の間にある弱音節の母音のため脱落しやすいという音韻的な理由もあると考えられる。

## 2. 5. 複合語

2 つ (あるいは 3 つ以上) の要素がハイフンにつながれて形成されている複合名詞の場合、複数形はどのように形成されるのであろうか。これには 4 つのタイプがある。まず 1 つは、第 1 要素と第 2 要素の両方が変化するタイプである。

(24) substantivo + substantivo: couve-flor — couves-flores,  
cota-parte — cotas-partes

(25) a. substantivo + adjetivo: amor-perfeito — amores-perfeitos,  
cachorro-quente — cachorros-quentes, padre-nosso — padres-nossos (padre-nossos)

b. adjetivo + substantivo: pobre-diabo — pobres-diabos,  
quinta-feira — quintas-feiras

(24) は複合名詞を構成する 2 つの要素がいずれも名詞、(25a, b) は 2 つの要素が名詞と形容詞類 (形容詞、数詞、所有詞) であるが、(25a) は 2 つの要素の順序が名詞—形容詞、(25b) は形容詞—名詞である。

次に、第 2 要素のみが変化するタイプがある。

(26) arranha-céu — arranha-céus, beija-flor — beija-flores

(27) sempre-viva — sempre-vivas, abaixo-assinado — abaixo-assinados, recém-vindo — recém-vindos

(26) は第 1 要素が動詞、第 2 要素が名詞で、(27) は第 1 要素が不変化語あるいは接辞、第 2 要素は名詞、形容詞類である。さらに、擬音語、あるいは繰り返しとなっている擬音語に由来する名詞も第 2 要素のみが変化する<sup>(6)</sup>。

(28) tique-taque — tique-taques, reco-reco — reco-recos

(26), (27) とは逆に、第 1 要素のみが変化するタイプがある。

(29) pão-de-ló — pães-de-ló, estrada-de-ferro — estradas-de-ferro

(29) は第 2 要素が前置詞で前後の名詞が繋がれている。この他、第 1 要素の名詞に対し、第 2 要素の名詞が目的、性質、類似など制限的な意味を表わす場合にも第 1 要素のみが変化すると述べられることが多い。

(30) café-concerto (com concerto) — cafés-concertos/cafés-concerto;  
caneta-tinteiro (com tinteiro) — canetas-tinteiros/canetas-tinteiro;  
escola-modelo (para modelo) —

escolas-modelos/escolas-modelo; mestre-sala (de sala) —  
mestres-salas/mestres-sala; palavra-chave (à maneira de chave)  
— palavras-chaves/palavras-chave

ただし、第1要素が主要語で、第2要素が修飾語になっているこの場合、(30)にも示したように第1要素だけでなく、第2要素も変化しうる。第1要素のみ変化すると述べる伝統を重んじる文法書は現在でも見られるが、Bueno (1963:162)ではこの場合について次のように述べられている。

(31) Se o segundo elemento indica a finalidade do primeiro, permanecerá invariável ... . Na linguagem dos jornais e até de documentos oficiais anda esta observação muito desconhecida ... .

特に現代では、第1要素と第2要素の両方を変化させる複数形がよく用いられるという指摘が一般にもなされている。第1要素のみ変化すべきという規範的な立場からの主張の根拠としては、*café-concerto*, *mestre-sala* といった場合、*café com concerto*, *mestre de sala* から派生しているとみなされ、これが前置詞で前後の名詞が繋がれている(29)と同じ型になっているということが考えられる。

しかし、第1要素と第2要素がいずれも名詞であるという点において、(30)は(24)と同じ型になっている。その(24)の *couve-flor* の場合も、第2要素が第1要素に対して制限的意味を表わしているにもかかわらず、その複数形として \**couves-flor* は認められない。つまり、第1要素と第2要素がいずれも名詞で、前者が主要語、後者が修飾語になっている場合に第1要素のみ変化するというのであれば、*couve-flor* の複数形も \**couves-flor* となるはずである。しかし、実際には *couves-flores* としかならず、(30)の複合名詞が第1要素のみ変化すべきだとすると、同じ型の *couve-flor* についても \**couves-flor* を正しい複数形として認めることになってしまう。

従って、第1要素の名詞に対し第2要素の名詞が制限的な意味を表わす場合に、一般に第1要素のみが変化するとは言えない。(30)の複合名詞も第1要素と第2要素のいずれもが名詞であることから、*couves-flores* の場合と同様の両方とも変化する形式も現れると考えられる。

最後の4つめは、第1要素、第2要素ともに変化せず、単複同形となるタイプである。

(32) o bota-fora — os bota-fora (verbo+advérbio)<sup>(7)</sup>, o sem-vergonha  
— os sem-vergonhas, o topa-tudo — os topa-tudo, o abre-latas  
— os abre-latas

(32)では、第1要素が動詞または前置詞、第2要素が不変化語または名詞複数形である。

以上は複合語が名詞の場合であったが、複合語が形容詞の場合もある。

(33) médico-cirúrgico — médico-cirúrgicos, luso-brasileiro —  
luso-brasileiros

複合名詞の複数形の形成には4つのタイプがあったが、複合形容詞では最後の要素のみ変化し、複数形が形成される<sup>(8)</sup>。ただし、(34)は例外となっている。

(34) surdo-mudo — surdos-mudos (f. surda-muda — surdas-mudas)<sup>(9)</sup>

上で述べてきた複数形の問題でしばしば取り上げられる複合語に、*guarda* が構成要素となっている場合がある。*guarda* が構成要素となる複合語は、Bergo (1986: 125-126) において、次の3つのタイプに分類されている(イタリアックは原文のまま)。

(35) a. *guarda é verbo e fica invariável quando seguido de substantivo que exprime o objeto da ação de guardar: guarda-roupa — guarda-roupas;*

b. *guarda é substantivo e se flexiona quando seguido de adjetivo, que com ele concorda: guarda-civil — guardas-civis; guarda-noturno — guardas-noturnos;*

c. *guarda é substantivo ligado a outro substantivo pela preposição de, clara ou subentendida, e neste caso só o primeiro varia: guarda de trânsito — guardas de trânsito; guarda-marinha — guardas-marinha. (Também se admite o plural guardas-marinhas, por analogia)*

まず、*guarda* が動詞の場合は、第2要素の名詞のみが変化する。次に、*guarda* が名詞で、第2要素が形容詞の場合は、両方とも変化する。最後に、*guarda* が第2要素の名詞と前置詞で繋がれている場合は、*guarda* のみ変化する。なお、この最後の場合の前置詞は、明示されることもあるが、明示されない(つまり、省略されていると解釈される)こともあると述べられている。

(35c) においては *guarda-marinha* 「海軍士官候補生」の複数形として、*guardas-marinha* と *guardas-marinhas* を認めている<sup>(10)</sup>。実際、*guardas-marinha* と *guardas-marinhas* の2つを認めている文法書が大多数である。

しかし、Almeida (1997:114) では、*guarda-marinhas* が正しい形であると述べられている。Almeida は同書で、*guarda* は動詞で、*marinha* は名詞であるから、*guarda-marinhas* が正しいと主張しているのである。

(35c) では、*guarda-marinha* には前置詞が省略されていると解釈されている。つまり、*guarda de marinha* から派生しているという解釈がなされていると考えられる。これに対し、Almeida (1997:114) では、この前置詞の省略という解釈に問題があることを指摘している。Almeida は *guarda-portão* 「門番」の場合も、*guarda de portão* から派生していると解釈されるにもかかわらず、複数形は \**guardas-portão* ではなく、*guarda-portões* になるので、前置詞の省略という解釈によって *guardas-marinha* を正当化することはできないと述べている。

Almeida (1997:114) では、この *guarda-portão* の複数形について疑問を持ったある人物と、これに答える Cândido de Figueiredo の興味深いやりとりも挙げている。要約すると、その疑問は、*guarda* には複数形(*o guarda, os guardas*)もあるし、見張る(*guardar*) 人が2人以上いて、1つの門(*porta*) を見張るような場合や、あるいは見張る人が2人以上いて、2つ以上の門を見張る場合でも、*guarda-portões* なのか、というものである。この質問に対し、Cândido de Figueiredo は、*guarda* は名詞ではなく、動詞であるから複数形は常に *guarda-portões* になる、と答えている。

さらに、Almeida (1997:114) は、*guardas-marinha* だけでなく、*guardas-*



marinhas も認めていない。その理由として、guarda が動詞であり、guarda-barreira「税関吏」の場合も、複数形は guarda-barreiras になることを述べている。

(35c) は、同様の記述が多く of 文法書でも見られ、一般的なものだが、Almeida (1997: 112) においては、これとは異なる規則が提示されている。(イタリックは原文のまま)

(36) *Apenas o último elemento vai para o plural sempre que o primeiro for ou invariável ou apocopado ou justaposto*<sup>(11)</sup>.  
最初の要素が動詞である guarda-marinha の複数形もこの規則に従って guarda-marinhas になるというわけである。

ただ、ここで、guarda が動詞であるか、名詞であるかの区別はどのようになされるのかといった疑問が生じる。このことに関連して、Almeida (1997: 115) には、第1要素の guarda が名詞で、第2要素が形容詞の場合は、両方とも変化するという記述もある。そうすると、第2要素が形容詞の場合 guarda は名詞であり、第2要素が名詞の場合 guarda は動詞とみなしうると考えられる。つまり、第2要素が名詞か形容詞かということによって、guarda が動詞か名詞かの区別ができるということになる。

そこで再び guarda-marinha を考えると、第2要素の marinha はやはり名詞であり、形容詞とみなすことはできない。なぜなら、第2要素が形容詞だとすると、guarda と性が一致した男性形の marinho が現れるはずだからである。第2要素 marinha が名詞であるから、guarda は動詞とみなしうることになる。このことから、(36) によって、guarda-marinhas が正しい複数形になるわけである。

複合名詞の複数形について、Almeida (1997: 112-117) では、4つの規則が提示されている。(36) がその1つであり、その他の3つは次の (37), (38), (39) である。

(37) *Vão os dois elementos para o plural quando ambos são variáveis e separados por hífen.*

(38) *Não se flexionará nenhum dos elementos quando forem ambos invariáveis ou quando o último já estiver no plural.*

(39) *Só o primeiro elemento irá para o plural quando estiver unido ao segundo pela preposição de.*

(38) は (32) に対する規則になっており、(39) は (29) に対する規則になっている。そして、(37) は (30) に対する規則になっているのだが、第1要素と第2要素の両方が変化する複数形のみ認めることになっている。すでに述べたように、couve-flor の複数形は couves-flores であり、\*couves-flor は認められない。

(37) の規則であれば、この couve-flor の複数形も例外ではなくなる。この点においては (37) は優れている。しかし、(37) では (30) における第1要素のみ変化する複数形を認めないことになってしまう。

Almeida (1997: 112-117) では、一般的になされている記述の問題が指摘され、独自の見解が示されている。そこで展開している説は、一般とは異なる1つの規範的な枠組みを提示するものとなっている。

### 3. むすび

ポルトガル語の数に関して、本稿でも一部示したように、形態上の興味深い現象が観察され、文法家によって依然として意見の異なる点もある。複数形が固定されていないということについては、文法の記述においては問題になるが、実際には使用者に選択の幅を持たせ、文体的効果をもたらさうものという見方もできる。他にも、複数の特殊な用法や人称との関係においても特徴が観察される。数はまた、統語上の重要な問題にも関係してくる。つまり、数は、一般にポルトガル語の統語論における3つの分野とされる統率 (*regência*)、配置 (*colocação*)、呼応 (*concordância*) のうちの呼応に関係するのである。数はさらに、語用論、文体論におよぶ問題をも含んでおり、今後従来からの文法的記述を進めていくこととともに、さまざまな観点からの考察も求められる。

#### 【略記号】

lat.	ラテン語	sg.	単数	f.	女性
II dec.	第2曲用	III dec.	第3曲用	IV dec.	第4曲用
Pt	ポルトガル	B	ブラジル		

#### 【注】

\* 本稿は、日本ロマンス語学会第36回大会（1999年5月22日、於愛知県立大学）において行った口頭発表の一部の内容に、加筆、修正を加えたものである。本研究を進めるに際し多くの貴重な文献を提供して下さった河村昌造先生に心からお礼申し上げますとともに、発表会場で貴重なご意見を頂いた先生方に感謝の意を表す。

- (1) *-ão* に対する複数形が2種類あるいは3種類存在する場合、*-ões* がもっともよく用いられる形式となっている。*correr* と *mão* の合成語である *corrimão* にも複数形が *corrimãos* と *corrimões* の2種類あるが、この2つのうち語源に従う *corrimãos* より、やはり *corrimões* がよく使われる形式である。（詳細は、Pinto (1998:245)、Cunha & Cintra (1985:176-177) を参照のこと）
- (2) *metafonia* はゲルマン語のウムラウト (Umlaut) に対応する用語である。*meta* がギリシャ語「変化 (*mudança*)」、*fonía* がギリシャ語「音 (*som*)」で、音変化 (*mudança de som*) を意味する。
- (3) *sogro* 「義父」の女性形には母音変異があり、*sogro* [o], *sogros* [o], *sogra* [o], *sogras* [o] となる。
- (4) 今日の一般的な文法書では、*globo*, *forro* 「(服の)裏地」も母音変異を起こさない名詞とされているが、Jota (1960:536-539) では母音変異を起こす名詞とされている。Ali (1964:46) においては、さらに *contorno*, *choro* も母音変異を起こす名詞としている。しかし、Ali の同書において、Evanildo Bechara が、これらの名詞は著者である Said Ali (1861-1953) の時代には母音変異を起こしていたが今日では母音変異を起こさない、という注釈を付している。
- (5) Pinto (1998:60) では、"Seria purismo injustificado pretender escrever **mulherzinhas e amorzinhos**, até porque o plural se forma instintivamente numa relação directa: **mulherzinha > mulherzinhas**." (なお、太字は原文のまま) とも述べられている。
- (6) ただし、この第1要素と第2要素が繰り返しとなっている複合語でも、両要素が動詞であれば、*pisca-pisca* — *pisca-piscas/piscas-piscas* (*piscar*), *ruge-ruge* — *ruge-ruges/ruge-ruges* (*rugir*), *luze-luze* — *luze-luzes/luzes-luzes* (*luzir*) 「蝋」のように第2要素だけでなく第1要素も変化しようと記述する文法書も少なくない。特

- に、Kury (1990:111) では、この場合は、一般的に両要素を変化させると述べられている。
- (7) *bota-fora* 「送別 (式)」は一般には単複同形とされているが、Barros (1997:32) には *fora* を名詞とみなして、複数形を *bota-foras* とする記述も見られる。Aurélio Buarque de Holanda Ferreira, *Novo Dicionário da Língua Portuguesa* (1994) においても、*bota-foras* を複数形としている。
  - (8) 性に関しても最後の要素のみ変化する。(f. *médico-cirúrgica* — *médico-cirúrgicas*)
  - (9) Torres (1981:60) では、"Em surdo-mudo, como adjetivo, varia o último elemento: "Eles são surdo-mudos." Como substantivo, variam ambos: "Os surdos-mudos ouviram e falaram."" と述べられている。しかし、大多数の文法書においては、形容詞でも *surdos-mudos* を複数形としている。ただし、*furta-cor* 「光で色合いが変わる、変化する色」の場合、形容詞としての複数形には *furta-cores* とともに *furta-cor* も認められており、名詞としての複数形には *furta-cores* のみ認められている。
  - (10) *guarda-marinha* はスペイン語の *guardia marina* に由来するとされる。
  - (11) この場合の不変化 (*invariável*) 語には動詞も含まれている。

### 参考文献

- Ali, M. Said. (1964): *Gramática Secundária da Língua Portuguesa*. Melhoramentos. São Paulo.
- Almeida, Napoleão Mendes de. (1997): *Gramática metódica da língua portuguesa*. Saraiva, São Paulo.
- Barros, Saulo C. Rêgo. (1997): *Manual de gramática e redação para profissionais de segurança do trabalho*. Ícone, São Paulo.
- Bergo, Vittorio. (1986): *Pequeno Dicionário Brasileiro de Gramática Portuguesa*. Francisco Alves, Rio de Janeiro.
- Bueno, Francisco da Silveira. (1958): *A Formação Histórica da Língua Portuguesa*. Acadêmica, Rio de Janeiro.
- Bueno, Francisco da Silveira. (1963): *Gramática Normativa da Língua Portuguesa*. Saraiva, São Paulo.
- Camara Jr., J. Mattoso. (1978): *Dicionário de Lingüística e Gramática*. Vozes, Petrópolis.
- Cunha, Celso. & Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- Farraco, Carlos Emílio. e Francisco Marto de Moura. (1995): *Gramática. Ática*, São Paulo.
- Jota, Zélio dos Santos. (1960): *Dicionário de Dificuldades da Língua Portuguesa*. Fundo de Cultura, Rio de Janeiro.
- 小泉保. (1990) : 『言外の言語学』 三省堂.
- Kury, Adriano da Gama. (1990): *Português Básico*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- Nicola, José de e Ulisses Infante. (1992): *Contemporânea da Língua Portuguesa*. Scipione. São Paulo.
- Pinto, J. M. de Castro. (1998): *Novo Prontuário Ortográfico*. Plátano, Lisboa.
- Ribeiro, Ernesto Carneiro. (1955): *Serões Grammaticaes*. Progresso, Salvador.
- Sacconi, Luiz Antonio. (1977): *Não Erre Mais! Nacional*, São Paulo.
- Sacconi, Luiz Antonio. (1990): *Nossa Gramática - teoria*. Atual, São Paulo.
- Torres, Artur de Almeida. (1981): *Moderna gramática expositiva da língua portuguesa*. Martins Fontes, São Paulo.
- Williams, Edwin B. (1962): *From Latim to Portuguese*. Second Edition. University of Pennsylvania, Philadelphia. (Tradução da primeira edição (1938) por Antônio Houaiss. (1986): *Do latim ao português*. Tempo Brasileiro, Rio de Janeiro.)